

心不相応行 (citta-viprayukta-saṃskāra) の 語義解釈

村 上 明 宏

1. はじめに

心不相応行 (citta-viprayukta-saṃskāra)¹⁾ は説一切有部の説く有為法の一つであり、五蘊の中の行蘊に含まれる法としても知られている。この心不相応行は部派仏教の時代になってから生じた法であると言われている。上座部ではこの心不相応行を認めることはなく、その他の部派によっても心不相応行に対する考え方は様々である。

本稿においては、経量部の立場に立つ称友 (Yaśomitra) の *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā* (以下, *SAKV*) と説一切有部の立場に立つ衆賢 (Saṃghabhadra) の『阿毘達磨順正理論』(以下, 『順正理論』) 等における心不相応行の語義解釈について考察を加えてみたい。

2. *Abhidharmakośabhāṣya* の心不相応行の語義解釈

Abhidharmakośabhāṣya (以下, *AKBh*) において、心不相応行は「これらの諸行は、心と[も]相応せず、色の自性で[も]ないので、心不相応と言われる」²⁾ と、極めて簡潔に述べられている。つまり、心不相応行とは、心とも相応せず、色を自性としなない “saṃskāra” に分類される法であるということである。この一文だけからは、この心不相応行についての理解を明確にすることはできない。

3. *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā* と『順正理論』における心不相応行の語義解釈

AKBh における心不相応行の語義解釈とは異なって、その註釈書である *SAKV* と『順正理論』では心不相応行の語義を明確に窺い知ることができる。

SAKV と『順正理論』の両書は、一致して心不相応行の語を「心 (citta)」と「不相応 (viprayukta)」と「行 (saṃskāra)」に分けた語義解釈を与えている。まず「心」

とは、色 (rūpa) と区別されるものとしての心であり、心と同じカテゴリーに分類されることを示すものと述べられている³⁾。次の「不相応」とは、心所 (caitta) と区別されるものと述べられている⁴⁾。つまり、「心不相応行」は、心に分類されるけれども、心所ではないものであるということを示すために「不相応」と言われているのである。そして、「行」と表現されたのは、「無為 (asamskrta)」と区別するためであると述べられている⁵⁾。以上が、SAKV並びに『順正理論』における「心不相応行」の語義解釈である⁶⁾。

この「行」の語義解釈から、SAKVと『順正理論』では、心不相応行の「行」は行蘊 (samskāra-skandha) を意味する狭義の「行」に言及しているのではなく、有為法全体を意味する広義の「行」について言及しているのであると考えられる⁷⁾。

このように称友や衆賢が「心不相応行」、即ち「色でもなく心所でもない有為法」の「有為法」を有為法全体と理解していることは、彼等がそこにおいて「無為法」(asamskrta) との対比を強く意識していることに由来するものと考えられる。

4. 「心不相応行が無為ではない」ことを強調する意図

では、何故に称友や衆賢は「心不相応行」を無為ではないと強調するのであろうか。

上座部では心不相応行は認められないが、「心相応」と「心不相応」という区分は言及されていると C. Cox 氏は指摘している⁸⁾。その典拠とされているのは *Dhammasaṅgaṇi* (以下, *Dhs*) の「色 (rūpa) と涅槃 (nibbāna) が心不相応法である」⁹⁾ という記述である。心不相応、すなわち心と相応しない法は色と涅槃であり、この涅槃は無為を本性とするものである¹⁰⁾。

先に見たように、SAKVと『順正理論』における心不相応行の「行」の理解の特徴は、それが「無為ではない」ということを強調する点にある。一方、上座部で心不相応と考えられていたものは、*Dhs* を見る限りにおいては、色と涅槃すなわち「無為」とされているのである。

有部の初期の論書である『阿毘達磨集異門足論』(以下、『集異門足論』)にも「心不相応行」ではなく「心不相応」ということが言及されている。『集異門足論』の中で「四食」(catvāra-āhārāḥ) と「行」に関する諸門分別がなされる際、上座部におけるのと同様に、「有為か無為か」という問いと「心相応か心不相応か」という問いが設定されている¹¹⁾。この『集異門足論』で問われている「四食」と「行」はどちらも有為であり、四食の中では段食 (kvaḍḍimkāra-āhāra) のみが心不相応と

(134) 心不相応行 (citta-viprayukta-saṃskāra) の語義解釈 (村 上)

される。更に、行もまた心不相応とされるが、これは『集異門足論』において行が「寿行」(āyus-saṃskāra) とされるからである¹²⁾。この寿行は『阿毘達磨品類足論』(以下、『品類足論』)に至って、心不相応行の中に数えられる「命根」(jīvita-indriya) と同義とされる¹³⁾。以上のように、上座部とは対照的に、有部においては、心不相応に関して“saṃskāra”が念頭に置かれていたことが推測される。しかし、この『集異門足論』では、まだAKBh, 『阿毘達磨法蘊足論』, 『品類足論』や『阿毘達磨發智論』で見られるような心不相応行の理解には至っていない。そして『集異門足論』の諸門分別の中に有為・無為, 心相應・心不相応という問いがあることより、「無為」という考え方に対して、「心相應」そして「心不相応」という考え方が生み出されたと考えられる。Dhsでは「心不相応」に関して“saṃskāra”は考えられていないが、『集異門足論』では「心不相応」に関して「行」が考えられていることより、『集異門足論』にある「無為」と「心不相応」ということが心不相応行の発展する過程において重要な意味を有するものと推測される。

Dhsは涅槃のみを無為と考えるのに対して¹⁴⁾、『集異門足論』では虚空、択滅無為、非択滅無為という三種の無為を説く¹⁵⁾。心不相応行を認めない上座部と心不相応行を認める有部における無為の捉え方はこの点で異なるのであるが、『集異門足論』における無為の説明は択滅無為に関することが中心であり、その択滅無為は「無為解脱」とされ¹⁶⁾、更には「苦滅の聖諦」が涅槃であると説明されている¹⁷⁾。したがって、三種の無為を説く『集異門足論』でも無為法の中心に据えられるのは択滅無為、すなわち涅槃であったと考えられる。いずれにしても、Dhsと『集異門足論』に見られる心不相応として理解された涅槃すなわち無為に対する考え方の相違が、心不相応行の発生や発展に大きな影響を与えた可能性が考えられるのである。

1) 心不相応行については、既に多くの研究がなされてきた。「心不相応行」自体を取り扱った研究には水野 [1997a], C. Cox [1995], 有部等の教理を論じている中で「心不相応行」に論及しているものには櫻部 [1969], 吉元 [1982], R. Kritzer [1999], 三友 [2008]。AKBhにおける心不相応行の語義解釈については、加藤 [1983], 那須 [2008]。などが主なものとして挙げられる。

2) AKBh p.62 ll.9-14. 3) SAKV p.142 l.31-p.143 l.3, 『順正理論』 T29.396.c12-16. 4) SAKV p.143 ll.3-4, 『順正理論』 T29.396.c16-17.

5) SAKV p.143 ll.4-7, 『順正理論』 T29.396.c17-19. 6) 安慧 (Sthiramati) の註釈 *Abhidharmakośabhāṣyaṭīkā Tattvārthā-nāma*, 満増 (Pūrṇavardhana) の註釈 *Abhidharmakośaṭīkā Lakṣaṇānusāriṇī-nāma* でも同様の語義解釈をする (那須 [2008] 参照)。

7) 『俱舍論記』 T41.1821.84a25-b6, 『俱舍論疏』 T41.1822.535b19-29, 『俱舍論頌疏』 T41.

心不相応行 (citta-viprayukta-saṃskāra) の語義解釈 (村 上) (135)

1823.844a8-16 では「心不相応行」の「行」は「行蘊」の「行」と考えられている。

- 8) C. Cox [1995] p.67. 9) *Dhs* p.254: rūpaṃ ca nibbānaṃ ca ime dhammā cittavippa-yuttā. 10) 「無為」についての主な先行研究として水野 [1997b], 池田 [1988], 宮下 [1989a, b] などが挙げられ, 涅槃が無為の本性であることが指摘されている。
- 11) 『集異門足論』 T26.1536.367c7-369b6. 12) 『集異門足論』 T26.1536.368c16-19. 13) 『品類足論』 T26.1542.694a23, T26.1542.723a29-b1. 14) *Dhs* p.244: katame dhammā asaṅkhatā? Nibbānaṃ-ime dhammā asaṅkhatā. 15) 『集異門足論』 T26.1536.369c6-7. 16) 『集異門足論』 T26.1536.376a4-5. 17) 『集異門足論』 T26.1536.392a20-21.

〈略号および使用テキスト・参考文献〉

AKBh: *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*. Edited by P. Pradhan. K. P. Jayaswal Reserch Institute, 1967 (1st ed.); *AKLA*: *Abhidharmakośaṭīkā Lakṣaṇānusāriṇī-nāma by Pūrṇavardhana* P.5597; *AKTA*: *Abhidharmakośabhāṣyaṭīkā Tattvārthā-nāma by Sthiramati* P. 5875; *Dhs*: *Dhammasaṅgaṇi*. Edited by E. Muller. The Pali Text Society, 1978; *SAKV*: *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā by Yaśomitra*. Edited by Unrai Wogihara. Tokyo: Sankibo Buddhist Book Store, 1971 (1st ed.).

『阿毘達磨集異門足論』 T26.1536; 『阿毘達磨法蘊足論』 T26.1537; 『阿毘達磨品類足論』 T26.1542; 『阿毘達磨發智論』 T26.1544; 『阿毘達磨俱舍論』 T29.1558; 『阿毘達磨俱舍積論』 T29.1559; 『阿毘達磨順正理論』 T29.1562; 『阿毘達磨藏頭宗論』 T29.1563; 『俱舍論記』 T41.1821; 『俱舍論疏』 T41.1822; 『俱舍論頌疏』 T41.1823.

C. Cox [1995]: Collett Cox, *Disputed Dharmas Early Buddhist Theories on Existence*. Studia Philologica Buddhica, Monograph Series 11. Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies; R. Kritzer [1999]: Robert Kritzer, *Rebirth and Causation in the Yogācāra Abhidharma*. Wiener Studien zur Tibetische und Buddhistische, Heft 44. Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien.

池田 [1988]: 池田練太郎「〈無為〉説の起源について」(『仏教学』第25号) 1988年; 櫻部 [1969]: 櫻部建『俱舍論の研究 界・根品』法蔵館 1969年; 加藤 [1983]: 加藤宏道「心不相応行の名義」(『印度学仏教学研究』31-2) 1983年; 那須 [2008]: 那須良彦「俱舍論根品心不相応行論(1)——世親本論と諸註釈の和訳研究——」(『浄土真宗総合研究』3) 2008年; 西村 [2002]: 西村実則『アビダルマ教学——俱舍論の煩惱論——』法蔵館, 2002年; 水野 [1997a]: 水野弘元「心不相応法について」(『水野弘元著作選集2 仏教教理研究』春秋社) 1997年; 水野 [1997b]: 水野弘元「無為法について」(『水野弘元著作選集2 仏教教理研究』春秋社) 1997年; 三友 [2008]: 三友健容『アビダルマディーパの研究』平楽寺書店, 2008年; 宮下 [1989a]: 宮下晴輝「涅槃についての一考察」(『大谷学報』60-1) 1989年; 宮下 [1989b]: 宮下晴輝「非摂滅無為」(『仏教学セミナー』第49号) 1989年; 吉元 [1982]: 吉元信行『アビダルマ思想』法蔵館, 1982年。

〈キーワード〉 心不相応行, saṃskāra, 無為, *Abhidharmakośabhāṣya*

(駒澤大学大学院)